

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 ^{まき} 牧 ^{あいこ} 藍子

本論文は、元禄時代の江戸俳壇の様相を、芭蕉門下の其角の俳風、元禄期連句の付句のいわゆる疎句化、前句付点者の調和や不角の活動、等々の様々な方向から考察し、具体的に明らかにしたものである。本書の構成は、第一章「蕉風における其角の俳風とその変遷」が「其角の「情先」」等の四節、第二章「初期俳諧から元禄俳諧への展開」が「詞付からの脱却―「ぬけ」の手法を中心に」等の三節、第三章「元禄期江戸の前句付」が「調和における前句付の位置」等の四節からそれぞれ成る。

第一章は、芭蕉門下で際立った都会風の句を作った其角について、主観の能動性により新しい情趣を見出す「情先」の理念を持つこと、「作者の誠」を重視したために芭蕉の不易流行観を「不易」に比重を置いて把握していたこと、其角の発句に見られる「ぬけ」の手法（必要な語を抜き取り、謎解きの面白さを句に付与する手法）は表現の斬新さを追求した談林俳諧が確立したものであり、俳諧の本質に根ざしていること等を、蕉門のみならず貞門・談林にまで及ぶ厩大な俳書から例を引き、詳細に分析しつつ明らかにする。

第二章は、元禄期の連句を付合の特質という点から検討し、談林的手法である「ぬけ」が連句史上で持つ意義は、付句において貞門的な詞付の範囲内で前句からの大きな飛躍を可能にした点にあり、それはその後の元禄期の心付による付句の疎句化によって超克されたこと、元禄風の付合は「元禄当流」とされる松春の付合に典型的に表れているように、穏やかな景気付と奇抜な趣向の心付の混交であること等を、鮮やかに論証する。

第三章は、江戸俳壇の重層性を把握するため、正式な俳諧より下に扱われた前句付でも活躍した調和と不角を取り上げ、調和には俳諧と前句付を別物とする意識はないこと、雑俳化傾向の強い不角の前句付興行は初心者らを俳諧に誘う手段となったこと、一方、新たに形成された前句付の作者層には不角門という意識が薄く、彼らを門下に繋ぎとめるため不角は月次興行や高点句集刊行に力を入れたこと等、新資料を駆使しつつ新見を提示する。

従来、元禄俳諧・元禄俳壇に関する研究は発句と蕉門に偏っていたが、連句への言及は蕉門についてさえごく少なかった。本論文は、蕉門以外の松春や調和・不角をも其角と同等に扱い、しかも「ぬけ」や「うつり」の付合手法や付句の疎句化等の連句に関する分析を中心として、元禄俳壇の特質を初めて全体的に描き出した点に大きな意義がある。今後は、連句の式作法の確立に最大の貢献をした支考をも含めた検討が望まれるが、付合における「ぬけ」の手法の歴史的意義を、豊富な資料と緻密な分析によって闡明したことは、今後の連句研究に新生面を開くものとして特に高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。